

達成度テストに関する高等学校への調査報告書

大学入試センター試験はどうか？ 達成度テスト導入については7割以上が「反対」

進路情報研究センターは、株式会社ライセンスアカデミー(本社:東京都新宿区)のシンクタンクとして、進学・就職等教育に関わる最新情報を発信しています。
この度、政府・教育再生実行会議からの提言に基づき、文部科学省中央教育審議会で検討が進められている「達成度テスト(仮称)」に関わる調査を、全国高等学校の進路指導部の先生方を対象に行いました。

□調査結果のポイント□

●達成度テスト導入については7割以上が「反対」

反対の理由には、「混乱」「負担」「複雑・煩雑」といった言葉が少なからず登場。現場レベルでは強い反対が。

●「発展レベル」は、「国公立1次試験」および「私立大の大学入試センター試験利用入試」で利用希望

現在のセンター試験と同じ機能を求め、加えて、推薦やAOでの学力検査に用いることも期待をにじませる。

●「発展レベル」の段階評価は7割近くが「反対」

「1点の重みの重視すべき」「1点差でどこかの段階を評価に決められるから同じでは」、さらに「あいまいで不公平感が拭えない」と苦言が多数。提言の意図するところは大きな隔たりが。

現行の私立大のセンター試験利用入試は「素点」で判定している。「発展レベル」はセンター試験の後継と目されているが、段階評価になるならば、そのみで合否を決定するには無理があり、どうしても個別試験が必要になってしまう。ただし、一般的に言って、個別試験は受験生に受験料や旅費・宿泊費で負担を強いるものである。それだけに地方在住者にとっては受験費用の負担を強いることになり、受験機会の平等性の上でも問題になりかねない。

●高校の会場提供、運営協力は大多数が難色

会場提供については「課外活動」「学校行事」「日常学習」への影響を、運営協力は「高校や教員の多忙」「試験の不正」への影響・不安をそれぞれ危惧している。運営協力の方がより拒否感が強い。

●テストが複数回行われる場合、高校生活から行事が消える可能性も

様々な負担が懸念される。また、影響を受け、縮小・廃止になると思われる行事は、「学校祭」「体育祭」「修学旅行」等が挙げられている。

●ボランティア活動や課外活動の評価は、意見が分かれる

「賛成」は「多角的な評価」への賛意が中心。「問題あり」は、「評価のあいまいさ」「入試のためのボランティアになる」等の不安・疑問。

●調査対象

全国の高等学校約5000のうち、2043校を抽出。ファックスにて質問紙を送付。

●調査方法、回収率

・設問は、教育再生実行会議「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」の「第四次提言」を参照にしながら問う形式。

・ほとんどの設問には、選択肢のほか、その理由について記す自由回答欄も設けた。

・2014年2月にファックスにて質問紙を発送。3月14日までに196校分を回収(回答率は9.6%)。

●集計上の注意

「空欄」「無回答」は、以下の集計から外している。そのため、グラフ・表に無回答欄はない。

●自由回答の扱い

・キーワードによる集計は、特定キーワードが自由回答欄の中に出現した回数を機械的にカウントしている。報告書では、「カウント」という単位を用いている。なお、テキスト型データを計量的に分析するために、「KH Coder」ソフトを利用した。

・キーワードの出現数に突出したものがない場合は、自由回答の中身そのものを概観して集計した。この場合、数え上げる単位として「回答数」を用いている。

●エリア別回答数×高校の種別

	専門学科、総合学科を有する高校	普通科単独の高校	計	割合
北海道	6	10	16	8.2%
東北	12	16	28	14.3%
北関東・甲信越	13	7	20	10.2%
南関東	5	26	31	15.8%
東海・北陸	18	14	32	16.3%
近畿	5	14	19	9.7%
中国・四国	9	8	17	8.7%
九州・沖縄	11	22	33	16.8%
総計	79	117	196	100.0%

(株)ライセンスアカデミー

進路情報研究センター

URL: <http://licenseacademy.jp/>

〒169-0073 東京都新宿区百人町2-17-24

TEL03-5925-1706

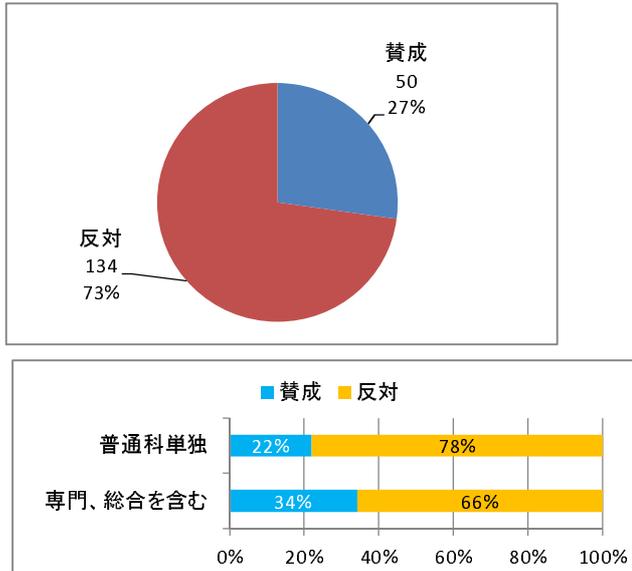
担当: 加藤泰志

e-mail: yasu-katou@licenseacademy.jp

※「北関東・甲信越」=茨城、栃木、群馬、山梨、長野、新潟 「南関東」=埼玉、千葉、東京、神奈川

①達成度テスト全般について

Q. 達成度テストの導入についての賛否。

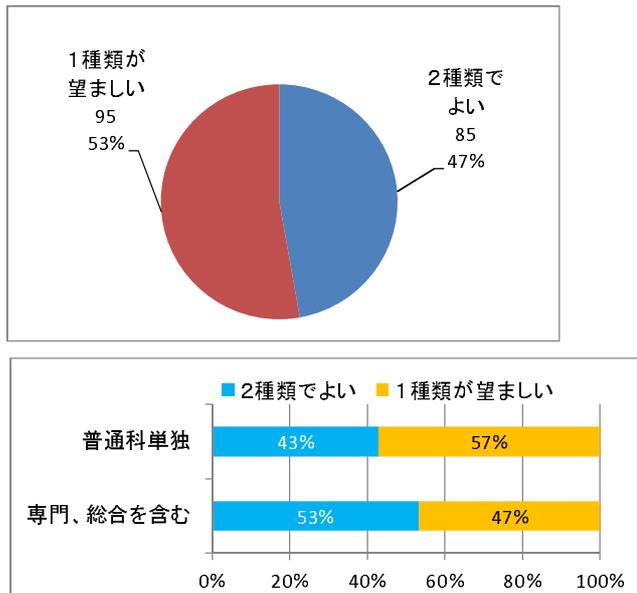


27%対73%で、「反対」が大勢を占める。学科別では、「普通科単独の高校」の方が反対が多く、80%近くに達する。

「賛成」50のうち、自由回答形式による理由が記載された回答は38。自由回答文章のためさまざまな「キーワード」が表れるが、その中に頻出するものがある。本調査では、「キーワード」を機械的に数え上げ、上位登場する「キーワード」に注目することで、自由回答の解釈を試みた。「賛成」の回答においては、「基礎・基本」9、「複数」8とカウントされた。つまり、こうしたキーワードが評価された項目だと解釈できる。一方、「反対」134のうち、コメントが付された回答は111。同じくキーワードで集約し、カウント数は「混乱」17、「複数」16、「負担」9、「複雑・煩雑」8、「影響」6、「無理」5と続く。試験が変わり、回数が増えることにより、負担が増し、行事やカリキュラムに対して悪影響を与えることを危惧しているイメージだ。

この設問とは別に、「進学指導に限れば、プラス、マイナスどちらに作用するか」についても質問した。こちらは、「プラス」43%、「マイナス」57%。先の質問と総合して考えるに、「反対」ではあるが、何らかのプラス面は認める」という意識も伺えた。

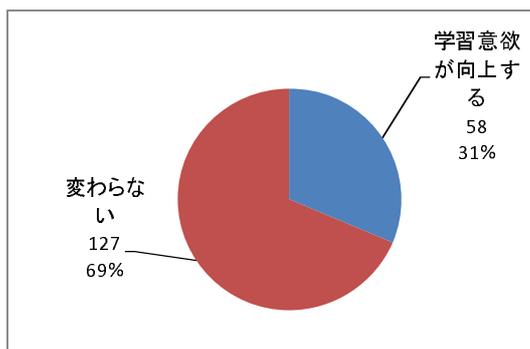
Q 「基礎レベル」と「発展レベル」の2種類のテストから成り立つことについて。



達成度テストの大きな特色は、テストが2種類想定されている点だろう。これについて、「1種類派」は過半数の53%。しかし、その差は6%に過ぎない。設置学科別に見ると、「専門学科、総合学科を有する高校」では、「2種類派」が過半数で逆転している。

「2種類でよい」で理由が付記されたのは52回答。そのほとんどが「生徒に学力差があるので、試験も複数必要」だった。中には、「もう1レベルくらい追加してほしい」「もっと細かく7段階に」という種類増の希望もあった。他方、「1種類が望ましい」の理由付記は74。「基礎レベルのみでよい」という要望が多く、「複雑・煩雑な業務を避けたい」という意見も少なからず挙げられた。

Q 達成度テスト導入で、高校生の学習意欲は変化するか。

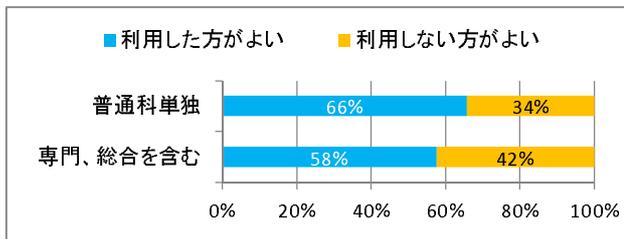
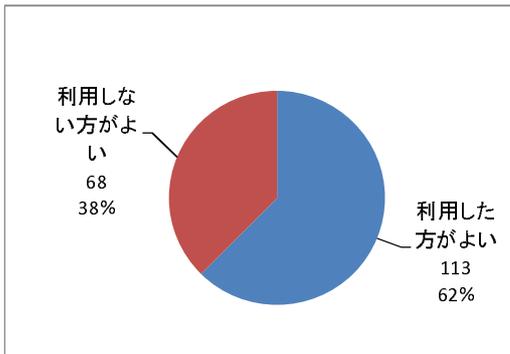


教育再生実行会議の第四次提言に掲げられた「高等学校の指導改善」を示しながら、学習意欲向上の可能性について尋ねた。総じて向上への期待感は低い。期待感の高低について、設置学科別の傾向はなかった。

「学習意欲が向上する」58回答のうち理由付き回答は43で、ほとんどが「(何らかの)テストがあれば学習する」だった。「AO、推薦」の改善策としての期待も見受けられた。「変わらない」の理由付き回答は80。大多数が「テストによる学習向上はない」と断言。理由の背景として、模擬試験や校内テストが数多く行われているが改善が見られない、と言及する回答が多い。

②達成度テスト「基礎レベル」について

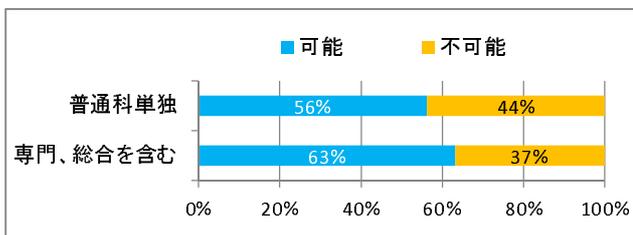
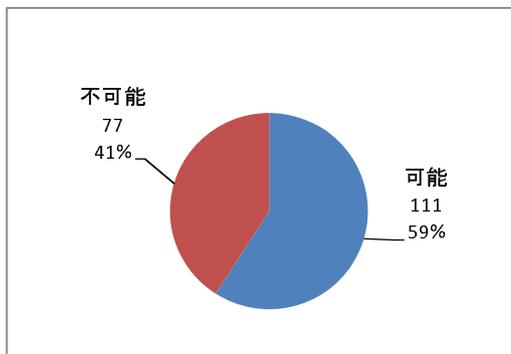
Q 達成度テストの基礎レベルを、推薦入試やAO入試で利用することについて。



利用した方がよいが多数。設置学科で支持状況が異なる。「普通科単独」の方が支持は高い。

「利用した方がよい」に付記された理由は83回答。キーワードによる集計では、「学力」が46カウントと他を大きく引き離している。推薦、AO入試による学力不足への懸念から、学力担保に活用したいという意思の表れだと考えられる。「利用しない方がよい」に付記された理由は49回答。こちらは、突出したキーワードがなかった。自由回答欄を概観すると、「推薦やAOの主旨から外れる」「アドミッションポリシーを重視してほしい」「多様な学生を求められなくなるのでは」といった懸念が見受けられた。

Q 達成度テストの基礎レベルについて、複数回実施の可能性は。



複数回実施の可能性を探ったが、4割が否定的。学科別に見ると、「普通科単独」では不可能の割合がより高くなっている。

「不可能」77回答中70回答に理由の記載があり、内容は多岐にわたった。自由回答を概観したところ、比較的多かったのは「多忙、時間がない」を挙げるもの。「カリキュラムの過密化」「行事や部活への影響」の言及もなされていた。ほかに、「それぞれの母集団が異なるため公平な評価とはならない」「カリキュラムの均一化につながり、高校の特色が薄れる」という理由も見受けられた。キーワードも分散気味だったが、カウント集計では、「行事」10、「授業」9、「進捗」7が上位に登場している。

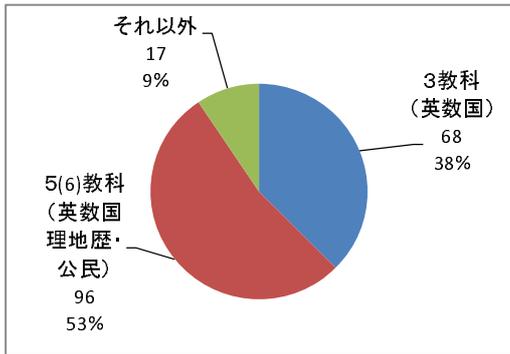
Q 現実的に実施できそうな回数、時期(月)は。

回数	回答数	割合
1(「複数回不可能」含む)	86	45.7%
2	52	27.7%
3	37	19.7%
4	5	2.7%
5	1	0.5%
6	2	1.1%
2回以上(回数不明)	5	2.7%
計	188	100.0%

1回(「複数回不可能」も含む)が最多で45.7%。複数回では、2回が27.7%、3回が19.7%。4回以上は非常に少ない。

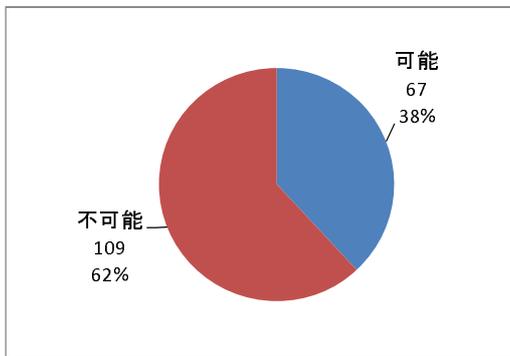
うち、表の「2回」において、1回分、2回分を合わせ、学年と時期の再集計を行った。のべ104の組み合わせがある中、対象学年は3年生66.3%、2年生26.9%、1年生4.8%、2年3年合同1.9%と集計された。さらに、学年と実施時期(月)の組み合わせでは3年1月22.1%、2年10月と3年10月いずれも9.6%という結果を得た。一般入試の日程、さらに、推薦・AOの入試日程が念頭にあるのだろう。

Q 出題のラインナップは。



5(6)教科の希望が多数。ただし、1、2学年対象の実施なら、3教科という回答もあった。「それ以外」のものとしては、「総合問題」「SPI」「芸術」「情報」「保健」が挙げられたが、それぞれ1回答にすぎなかった。

Q 「知識・技能の活用力、思考力・判断力・表現力も含めた幅広い学力を把握」は可能か。

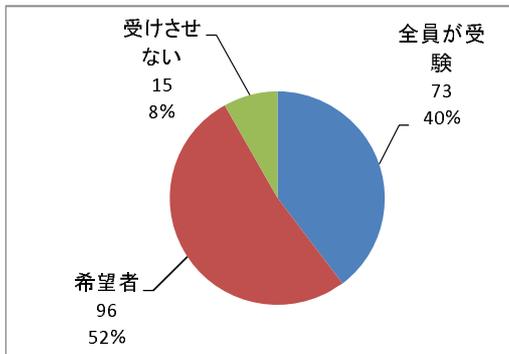


第四次提言に、「知識・技能・・・幅広い学力を把握」とあるが、その実現性を尋ねたところ、「不可能」が60%を超えた。

「可能」回答にあった実現可能な案の記載は、67回答中55回答にあり、キーワード集計では「小論文」8、「記述式」5が上位にカウントされた。ほか少数ではあるが、「SPI」「実技」「面接」も寄せられた。客観式以外の方法に期待がかかる。

他方、「不可能」では、109回答中95回答にその理由が寄せられた。達成度テストの詳細は明らかになっていないが、全国規模の実施を考えれば客観式だけになると判断したのだろう。キーワードによる集計では、「ペーパー」9、「マークシート」8が上位にカウントされた。「マークシート」などでの解答方式では、その把握が不可能という意見がうかがえる。

Q 受験は、必須、希望者のみ、受けさせないのいずれか。



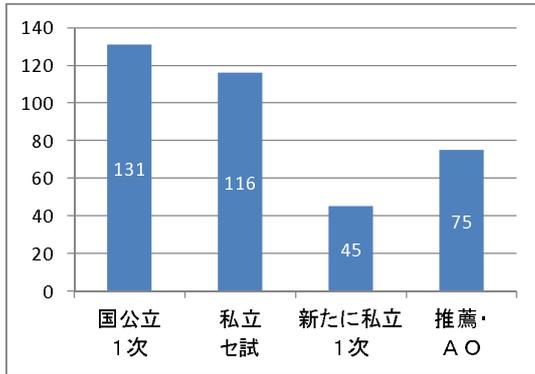
「希望者だけ受ける」が過半数を占めるが、「全員受験」も4割に達している。

「希望者」の96回答中51回答に理由が記載。自由回答の内容を概観すると、多かったのは「進学志望者のみでよい」「全員希望だが学校の実情を考えると無理」。「進学希望のうち、推薦、AO限定」という回答もあった。また、「全員受験だと学校の格付けになる」という懸念も出された。「全員が受験」は、96回答中53回答で理由が記載。「学力の把握」のほか、提言では否定気味だったが「卒業の認定、大学入学資格」としての期待も寄せられた。

「受けさせない」は15中11で理由記載。「テスト自体に意味がない」「定期考査で十分」など否定的な内容が挙げられた。

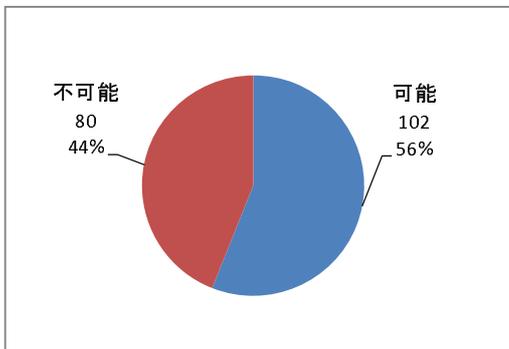
③達成度テスト「発展レベル」について

Q 達成度テストの発展レベルは、どのような入試で使用されるべきか。(複数回答可)



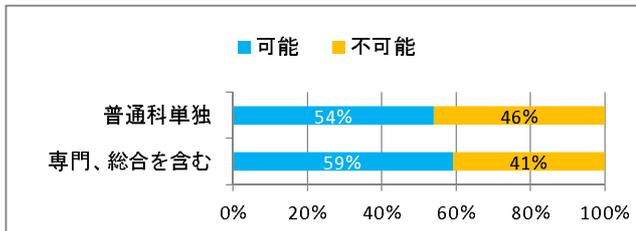
「国公立1次試験」および「私立大のセンター試験利用の代替」としての利用希望が、それぞれ131回答(67%)、116回答(59%)に達している。続いて、75(38%)が「推薦・AO入試での利用」を考えている(割合は全196回答を100%としたもの)。
現在のセンター試験と同じ機能を求め、加えて、推薦やAOでの学力検査に用いることに期待をにじませる結果だ。
また、「一律に決めることなく、各大学の判断によればよい」とする意見も少なからずあった。
なお、段階別判定のみでは、現在のような私立大のセンター試験利用入試の代替にならないという、大きな問題をはらんでいる。

Q 達成度テストの発展レベルについて、複数回実施の可能性は。



全体集計、設置学科別集計とも、「基礎レベル」と同じ傾向だった。

「不可能」の80回答中68回答に理由の記載があり、内容は多岐にわたった。自由回答を概観したところ、集中したのは「試験を実施・運営できるのか」「行事や部活へ悪影響」など。ほかに、「学校間のカリキュラム進度の違い」という理由も挙げられた。さらに、現行のセンター試験が結局、複数回実施にならなかった点を指摘した上で、「今回も無理」とする意見もあった。



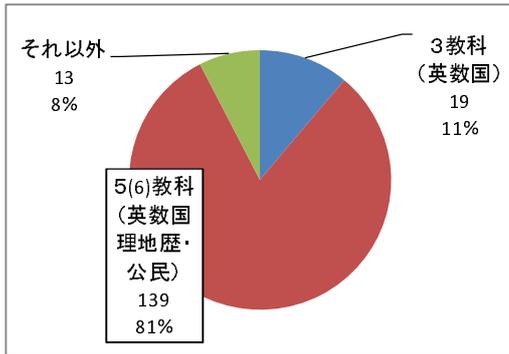
Q 現実的に実施できそうな回数、時期(月)は。

回数	回答数	割合
1(「複数回不可能」含む)	93	51.1%
2	50	27.5%
3	33	18.1%
4	2	1.1%
2回以上(回数不明)	4	2.2%
計	182	100.0%

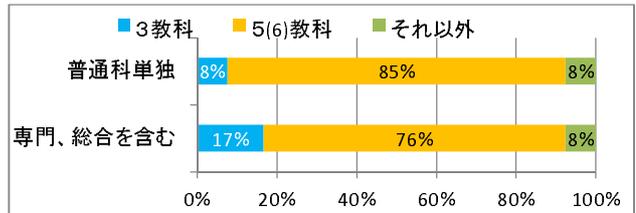
1回(「複数回不可能」も含む)が過半数51.1%。複数回では、2回が27.5%、3回が18.1%。発展レベルでは5回以上の希望はなし。

「基礎レベル」の設定と同様、表の「2回」において、1回分、2回分を合わせ、学年と時期の再集計を行った。のべ98の組み合わせがある中(時期記載なしが1回答)、対象学年は3年生84.7%、2年生11.2%、1年生2.0%、2年3年合同2.0%と集計。「発展レベル」のためか3年生に受けさせたい意向が、「基礎レベル」よりも強い。
学年と実施時期(月)の組み合わせでは、ここでも3年1月に集中し30.6%。3年9月が10.2%、3年2月、11月、12月がいずれも6.1%という結果を得た。時期の傾向は「基礎」に準じているが、より一層一般入試の日程を踏まえたものになっている。

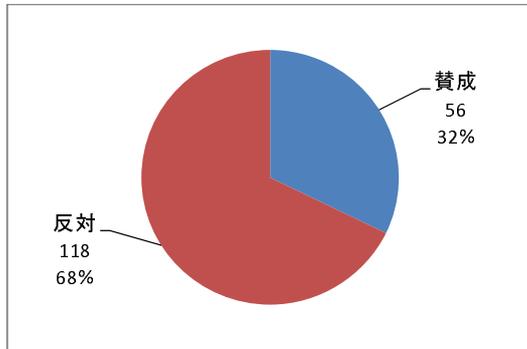
Q 出題のラインナップは。



これまでの調査項目からうかがえるように、「発展レベル」はセンター試験の代替であり、3年生が対象と考えられている。そのためか、5教科(6教科)の希望が80%を超える。「それ以外」は13だが、具体的に挙げられたのは「芸術」および「総合問題」各1回答。中教審では「総合型」の出題について言及があったが、高校側の意識とのずれを感じる。設置学科別では、「普通科単独の高校」の方がより一層5教科(6教科)の希望が強かった。



Q 段階的評価への賛否は。



段階評価は7割近くが「反対」。その118回答のうち65回答で理由が付された。キーワードが分散したので、自由回答そのものを概観したところ、「1点の重みを重視すべき」が13回答、「1点差でどこかの段階を評価に決められるから同じでは」および「あいまいで不公平感が拭えない」がともに9回答あった。先述したように、私立大のセンター試験利用入試にどう対応するかという問題がある。

Q 段階的評価に「反対」する際、代替案として考えられるものは。(複数回答可)

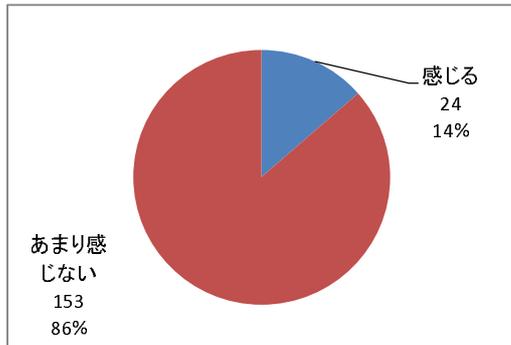
代替案	回答数
従来のような1点刻みの判定	73
2次試験の受験資格試験として利用	23
偏差値方式のような新しい成績評価	10
その他	3

従来のような1点刻みの支持が高い。なお、「2次試験の受験資格試験として利用」とは、基準をクリアすれば達成度テストの成績は問わないとする方式である。

Q 段階的評価に変更することで、高校生は自身の評価についてどう考えると予想するか。(自由回答欄のみの設問)

全回答196の21%にあたる41回答に予想の記入があった。回答そのものを大別したところ、「あいまいさ、不安」11、「ランキング助長」8、「意欲向上」6、「自身について甘くなる」6。なお、「ランキング助長」だが、「現在すでに類似した業者テストがありそうした風潮が現れている」という報告が付記されていた。

Q 現行入試での1点刻みの弊害は感じるか。



先の段階的評価の賛否とも関連する質問。第四次提言で危惧された1点刻みの弊害は、本アンケートでは否定的であり、「あまり感じない」が86%に達している。記載された理由については、段階的評価と同傾向。

一方、「感じる」24回答のうち、理由の記載があったのは17。ただし、第四次提言が意図したような弊害指摘は少なく、「受験した科目の平均点や分布が考慮されていない」「そもそも1題当たりの配点が大きすぎる」など多彩な内容が挙げられた。

④達成度テスト全般について 2

Q 達成度テスト実施で、会場提供や試験運営について、高校に協力要請があった場合。

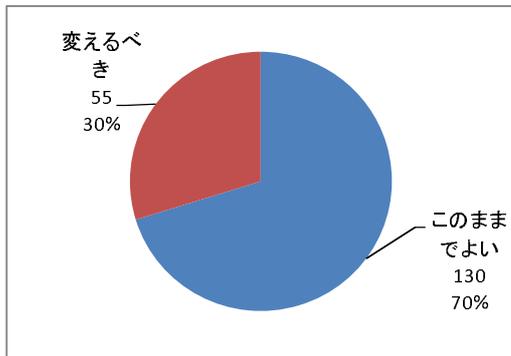
会場提供	回答数	割合
問題なし	60	32.4%
問題あり	125	67.6%
計	185	100.0%

現時点では不明であるが、協力要請を想定した設問。いずれも「問題あり」が多数だった。

試験運営	回答数	割合
問題なし	28	15.2%
問題あり	156	84.8%
計	184	100.0%

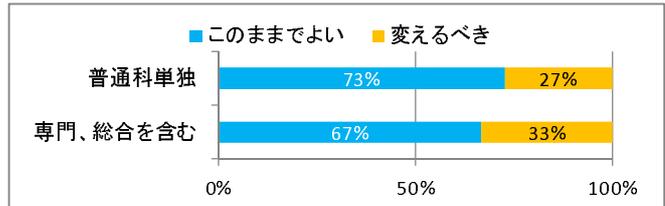
「会場」の「問題なし」は、すでにセンター試験や各種資格試験で使われていることが理由として挙げられた。「問題あり」の理由は多くの回答に寄せられ、「課外活動」「学校行事」「日常学習」などの制限が大部分で、複数回が前提となった試験のために一層拒否感が増したようだ。一方、「運営」は「会場」以上に強い拒絶がうかがえた。「高校や教員の多忙」のほか、高校教員が携わることで「試験の不正を危惧」「緊張感を保てない」など、試験の根本に関わる不安が出された。

Q 現行の大学入試センター試験は変えるべきか。

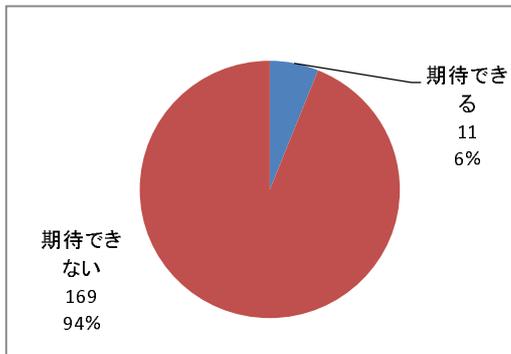


「このままでよい」が多数だが、「専門学科、総合学科を有する高校」では、「変えるべき」の割合が30%以上になる。

「このままでよい」130回答では、91回答に理由が記され、概観したところ、「定着している」「良問だ」という高評価が頻出した。「変えるべき」55回答では、45回答に理由が。「1回だけしか実施しない」「マークシートの使用」「私大の利用形態への疑問」「リスニングの実施」「カリキュラムが変わる中、試験だけが不変」などさまざまな苦言が呈せられた。

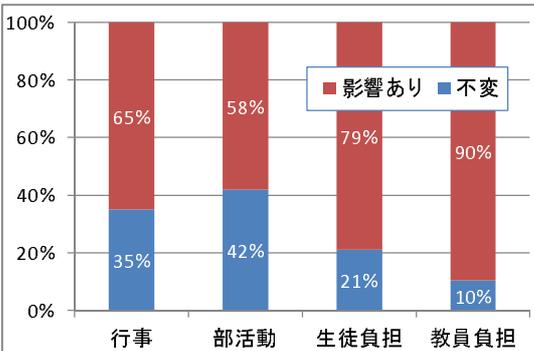


Q 今後、中教審での審議となるが、高校現場の声を反映させる仕組みになっているか。



強い不信感が伺える結果になってしまった。「期待できない」の理由の大半は、「現場の声が届かない」「中教審の人選に疑問」に集約された。また、「結論ありきだ」「低学力層の実態を知らない」などの意見も出された。

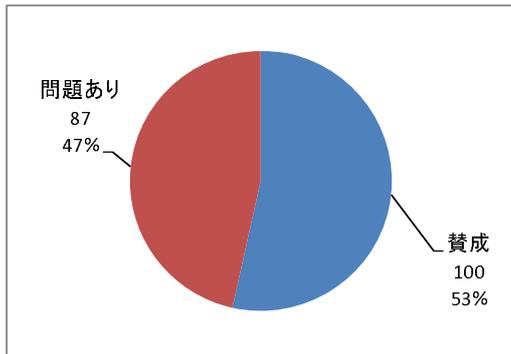
Q テストが複数回行われた場合、どのような影響があるか。



複数の項目について、影響の有無を尋ねた。「影響あり」の具体的内容は項目ごとに異なり、アンケートでは、「行事」は「減少」、「部活動」は「低調」、「生徒」および「教員」は「負担増」を掲げた。教員負担の増加が特に懸念されている。影響を受けると思われる行事は、「学校祭」「体育祭」「修学旅行」など。

なお、「校外(業者)テスト」の影響についても尋ねた。「変わらない」86、「回数増やす」38、「回数減らす」54という結果を得た。新しいテストの対策のため校外テストを増やす、逆に、テスト自体が増えるから校外テスト減らすなど、対応はさまざまだ。

Q ボランティア活動や課外活動を、入試で評価することについて。



本項目が、調査の中で最も意見が分かれた。「賛成」100回答のうち54回答に理由が付された。多くは「多角的な評価」への賛意だった。

他方、「問題あり」は87回答のうち75に。キーワードによる集計だと「客観」6、「公平」5、「公正」4が上位にカウントされ、こうしたところが評価の不安点になっている。また、「入試のためのボランティアになる」といった危惧も寄せられた。

Q 試作問題や実施細目まで含めた望ましい発表時期は。

	3年前	4年前	5年前	計
専門、総合を含む	28	14	34	76
普通科単独	27	22	57	106
計	55	36	91	182
割合	30.2%	19.8%	50.0%	100.0%

「5年前」、次に「3年前」と続く。中高一貫校の場合は、さらに長い準備期間が必要という意見があった。

また、「専門学科、総合学科を含む高校」よりも、「普通科単独の高校」の方が長い準備期間を求める傾向にある。

Q 複数回実施により、各回ごとの出題の範囲、難易等について公平性は保たれるか。

学科別	保たれる	保たれない	計
専門、総合を含む	23	47	70
普通科単独	30	71	101
計	53	118	171
割合	31.0%	69.0%	100.0%

全体として、「保たれない」という危惧が強い。「普通科単独の高校」ほど危惧感がより強い結果となった。

「保たれる」では、ある程度の差は容認した上で、「偏差値法」など何らかの工夫で公平性を追求する意見が多い。

「保たれない」118回答中63回答に意見が付された。現行のセンター試験の科目間平均点のばらつきを前提に、「複数回実施でさらに公平性維持困難」「高校間の進度の違い」などを危惧する意見が出された。

●まとめ

達成度テストの意義について、筑波大学副学長の清水一彦教授は、「いかなる制度も40年サイクルで制度疲労を生じるという観点から見れば、受験生の能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価する新たな大学入試制度を構築する時期に来ている」と評している。入試および学習評価のシステムは、これからの時代にあったものに変えるべきだろう。

ただ、本調査は、高校側が多大な負担を危惧していることを明らかにした。負担は高校教員のみならず、高校生にも課されるものだ。これでは、理念を論じる前に大きな拒否感を抱いてしまう。

同教授もこの点について、「現場の強い反対は真摯に受け止め、拙速だけは避けるべきだ。内容によっては見送るなど、何らかの接点を見出して実施されるべき」と問題点を時間をかけて議論していくことの大切さに言及した。

昨秋に教育再生実行会議より「第四次提言」は発表された。その後、中央教育審議会に舞台を移し、具体像が論じられてきている。そこでの討議内容を見ると、進捗はしているが、課題はまだ多い状況であると言える。入試制度の改革は高校教育および大学教育のあり方に関わるものであり、大きな社会的責任を負うものである。

本調査を高校現場の意見として同会に届け、今後の論議の資料になることを願う次第だ。

もう一つ大きな問題がある。

現在、3割以上の受験生が利用している私立大のセンター試験利用入試において、段階的評価をとる達成度テスト(発展レベル)はセンター試験の代替になり得るのだろうか。今後、この構造的な問題に対し、どう対処するか難しい。

「センター試験はこのままでよい」70%、「段階的評価に反対」68%という数字をどうとらえ、改革を進めていくのか。達成度テストを構造的に考慮しなければいけない問題点といえよう。